アナール学派を中心とした関係図

作成：木下知威

XXe

1982-83 バークレー『Representation』創刊。

1975　〈社会科学高等研究院〉に。全体史の展開。

1970代 アナールが世界的なものではなくなる。
理由はマンタリテ（心性）の定義が不明瞭なこと。よって、その歴史も定義できないまま。

1947　〈高等研究院第六部門〉創立。『アナール』は知的運動体から、制度として確立。

1946　『年報——経済、社会、文明』と改名。

1945　『社会史年報』に戻る。

1942–1944　『社会学論集』と改名

1939–1941　『社会史年報』と改名。

1929　フェーヴルとブロック『社会経済史年報』創刊

XIXe

1898　デュルケーム、L'année Sociologique『社会学年報』発刊

1891 ラ・ブラーシュ、Annales de Géographie『地理学雑誌 』発刊

XVIIIe

1774 ジャンバッティスタ・ヴィーコ（Giambattista Vico）死去

ロジェ・シャルチェ
(Roger Chartier)
『書物の秩序』

カルロ・ギンズブルグ
(Carlo Ginzburg)
1939 -
ミクロヒストリー/マクロヒストリー

ジェラール・ノワリエル
(Gérard Noiriel)1950-
Sur la « crise » de l'histoire, Paris, Gallimard, coll. « Folio, histoire, 136 », 2005.
残された文書の跡から歴史の姿を探る以外本質的方法はないという点を強調する「言語論的転回」

デヴィッド・ハウズ(David Howes) 1957-
Sensual Relations. Engaging the Senses in Culture and Social Theory, Ann Arbor, University of Michigan Press, 2003.　-- (dir.), Empire of the Senses. The Sensual Culture Reader, Oxford, Berg, 2005.
「感覚的転回」
「ハウズの仕事はフェーヴルに近づくものと言える。」

フランソワーズ・ゾナバンド
(Francoise Zonabend)
"la mémoire longue"
『小さな村』

アンドレ・ビュルギエール
(André Burguière)
L'Ecole des Annales. Une histoire intellectuelle, Paris, Odile Jacob, 2006.

二人の関係について論述
「フェーヴルはエリアスと違い、継続的で線的なプロセスと見えるものを重要とは考えなかった。」

ジョナサン・クレーリー
(Jonathan Crary)

「近代の個人は、世界に対して離れた観客の立場を取り、世界を目の前で起こっているスペクタクルとして観察するようになった。」

「プラトン以来「高貴な」感覚とされてきた視覚と聴覚をさらに特権化することになり、触覚と嗅覚の相対的な後退につながった。ここでフェーヴルとのつながりが現れる。」

カルル・アベランジュ
(Carl Havelange)
De l'œil et du monde. Une histoire du regard au seuil de la modernité, Paris, Fayard, 1998.

「ルネッサンスにおいて、個人が宇宙や鉱物や動物や人的環境との間に持っていた直接的な絆が次第に解かれていったことを示した。」

ミシェル・フーコー
(Michel Foucault)
1926 - 1984

リュセット・ルヴァン・ルメール
(Lucette Levan-LeMesle)

「彼は、アナールのはっきり分離した二流派（赤線）を見事に分析している。」

アラン・コルバン
(Alain Corbin)
1936 -

分析に同意していた

アナール研究に不可欠

「私自身、ラブルース的な展望で歴史研究を始めた。」
（間接的に指導を受けたことがある）

ロベール・マンドルー
(Robert Mandrou)
1921-1984
Introduction à la France moderne (1500-1640). Essai de psychologie historique (1961), réed. Paris, Albin Michel, 1998.

ジョルジュ・デュビィ
(Georges Duby)
1919-1996
「社会的想像力」

アルフォンス・デュプロン
(Alphonse Dupront)
1905-1990 十字軍史

フェーヴルに近い人たち
「心性（マンタリテ）や心理的道具立ての概念に密着していた歴史家たち、広い意味で歴史的心理学の概念により近かった人たち」

エルネスト・ラブルース
(Ernest Labrousse)
1895 - 1988
注:アナール学派に属せず

「私はミシュレのロマン主義的歴史学に忠実だ」

エマニュエル・ルロワ=ラデュリー
(Emmanuel Le Roy Laduire)
1929 -　気候の歴史
"Ethnologie française"
『フランス民俗学』

数量的・時系列的歴史学

ピエール・ショーニュ
(Pierre Chaunu)
1923 -
『セヴィリアと大西洋』
「数量的・時系列的歴史学はChaunuの造語」

構造主義

ジャック・ル=ゴフ
(Jacques Legoff)
1924 -
"Mantalité"
この言葉は英語が先

歴史人類学

クロード・レヴィ=ストロース
(Claude Gustave Lévi-Strauss)
1908 -

フーコー、アベランジュとともに

学生が質問で関係を指摘

フェルナンド・ブローデル
(Fernand Braudel)
1902 – 1985
『地中海』
歴史的時間の三区分

影響

マルク・ブロック
(Marc Bloch)
1886 - 1944
『王と農奴』『フランス農村史の基本性格』『封建社会』

マルセル・モース
(Marcel Mauss)
1872 - 1950
「近隣性」「身体文化」

エルンスト・カッシーラー
(Ernst Cassirer)
1874 - 1945

ノルベルト・エリアス
(Norbert Elias)
1897-1990
『文明化の過程』

「感性の歴史」

師弟

対峙

リュシアン・フェーヴル
(Lucien Febvre)
1878 - 1956
『ラブレー』など

Processusについて対峙する関係
一日目レジュメの「エリアスは確かに、中世以来・・・」以降を参照すること。

デュルケーム学派創設の中心人物

アンリ・ベール
(Henri Berr)
1863 – 1954

「心理的歴史学の代表的な仕事は、ベールの『Revue de synthèse』や『Evolution de l'humanité』の初刊数号に。心理学的歴史学は、内容を変えながらも、概ね19世紀のミシュレに代表されるロマン派的歴史の延長線上にあったものである。」

フェーブル思想の中核

とりこむ

アンリ・ヴァロン
(Henri Wallon)
1879-1962 心理学
"Outiallge mental"
「心的道具」

師弟

「デュルケームが開始した社会学に対し、歴史研究の特殊性を強調。」

ガブリエル・モノ
Gabriel Monod
1844 - 1912

デュルケーム学派

エミール・デュルケーム
(Émile Durkheim)
1858 - 1917

モーリス・アルブヴァクス
(Maurice Halbwachs)
1877 - 1945

フランソワ・シミアン
(François Simiand)
1873-1935 経済学
「時間の計量」

リュシアン・レヴィ=ブリュール
(Lucien Lévy-Bruhl)
1857 - 1939
"La mentalité primitive"
「人類学とその原初的心性という概念の影響も重要である。」

ヴィダル・ドゥ・ラ・ブラーシュ
(Vidal de la Blache)
1845-1918 地理学
「フランスの歴史家はラブラーシュが中心となった学派の影響を受けている。」

「５つの問題（２日目レジュメ参照）を解決するため、ブロックとフェーヴルは歴史と隣接した諸科学から多くの発想と方法を借用した。」

エルネス・ラヴィス
(Ernest Lavisse)
1842-1922

こきおろす

小学校の歴史の教科書を60年間書いていた。非常に重要

師弟

ジュール・ミシュレ
(Jules Michelet)
1798 - 1874
『海』

歴史心理学の別名は「ロマン主義的歴史学」つまり、過去をよみがえらせることを目的とした歴史学
「「五感の感性」の重要さは、19世紀においてすでにマルクスやニーチェを始め、ミシュレなどの歴史家も主張していた。」